

平成 29 年度中間評価結果への対応状況と今後の事業展開について

機関名	東北大学				
統括責任者	役職	総長	実施責任者	部署名・役職	理事・副学長（研究担当）、 研究推進・支援機構長
	氏名	大野 英男		氏名	早坂 忠裕

平成 29 年度中間評価結果
評点区分：S
全体に対する所見
<p>当初構想を着実に遂行するとともに、大学全体の機能向上に向けて積極的に取り組み、今後の発展が十分に期待できる将来構想が構築されており、事業終了後の財源についての目標も明確なものとなっているなど、高く評価できる。</p>
当初構想・計画の進捗状況に対する所見
<p>URA の職務内容・処遇を制度上明確に規定することで、執行部や研究者との信頼関係が順調に醸成されており、独自のスキル標準化による高度化への取組も行われている。ベンチマーク大学との連携による国際交流が順調に進捗している。</p>
今後 5 年間の将来構想に対する所見
<p>三階層「研究イノベーションシステム」を構築することで、システムティックな研究推進体制が期待され、研究力強化の取組を明確に具体化している。国際混住型学生寮の設置によって国際交流が進展することを期待したい。</p>

将来構想の達成に向けた現状分析
将来構想 1 【世界から尊敬される三十傑大学としての優れた研究力】
<p>① 平成 29 年度中間評価所見の反映状況</p> <p>大学全体の研究・教育力の向上を目指し、全学的 URA 機能の強化や新しい産学連携推進体制を確立する。URA の自主財源化計画を策定する。また、事業終了後の具体的財源確保を確実に実行できるようにする。</p>
<p>② 現状の分析と取組への反映状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全学的 URA 機能の強化： <p>（現状）URA の職務内容、職階、処遇を制度として明確にするとともに、URA のスキルアップや情報・意見交換の場として開設された URA 連携協議会のメニュー設計を行った。</p> <p>（反映）全学的に掲げる「世界三十傑」構想に基づく諸課題に対し、URA に期待する具体的能力・機能を強化するために URA 連携協議会メニューをフル活用する。また、各 URA が体得したスキルに応じた URA 資格認定制度の運用を開始する。</p> ・アンダー・ワン・ルーフ構想に基づく新しい産学連携推進体制の構築： <p>（現状）産学連携に強くコミットする部局、研究センター、事務機構をキャンパス内の特定地区（理系部局が隣接する青葉山地区）に集約した産学共創スクエアを基本インフラとして、効果的に産学連携を進める「アンダー・ワン・ルーフ構想」について、その制度設計を行った。</p>

(反映) アンダー・ワン・ルーフ構想に基づく新しい産学連携推進体制を構築し、具体的な取り組みを実施するために設立した産学共創スクエアを本格的に運用開始する。

・学生・若手の研究力強化策：

(現状) 学生および若手に関する研究ステータスの基本情報を収集し、学生および若手の支援策について検討した。

(反映) 研究力向上には、若手、特に博士課程学生の研究アクティビティを向上させることが肝要であり、学生の博士課程進学を促進させるための一助として、学部学生を対象とした特別研究員制度の説明会を開始した。

・自立的な研究環境の提供を前提とした優秀な若手研究者のポスト確保：

(現状) 学際科学フロンティア研究所の助教、准教授ポストの国際公募を利用して、若手のためのテニユアトラック人事制度について検討し、基本的な制度の骨子を固めた。

(反映) 東北大学版テニユアトラック制度を具体的に策定し、実際に運用を開始する。

・「世界三十傑大学」に相応しい国際水準キャンパスの実現に向けた取り組み：

(現状) 国際混住型学生寮を拡充し、約1,800人の入居者数を達成するための建物設計と財源確保を果たした。

(反映) 国際混住型学生寮の拡充に関する当初目的を着実に達成する。

・海外拠点を活用した国際共同研究の推進：

(現状) 本事業の補助金によるジョイントリサーチラボを複数の海外ベンチマーク校に設置し、ポスドクを常勤させて研究活動を行う。またこれと並行して、自主財源によるジョイントリサーチセンターをも複数の拠点に設置する。

(反映) ジョイントリサーチセンターを利用し、海外拠点校から研究者を長期で受け入れ、競争的研究資金を自ら獲得して人材の長期双方向交換を果たす。

・短期滞在海外研究者への機器共有：

(現状) AIMR (材料科学高等研究所) における共通機器の利用について、適切な課金を開始した。

(反映) AIMR 以外の学内外研究者 (短期滞在外国人研究者を含む。) への機器共有開始へ向け、スキームの検討を行うこととした。

【参考】論文の質に係る指標について

2013年-2017年平均	Scopus	WoS
国際共著論文率	31.8%	————
産学共著論文率	5.5%	————
Top10%論文率	13.8%	————

研究大学強化促進事業推進委員会コメント

- URA の職務内容が急激に広がり学内外に認知されていることが強く窺われ順調に成果を上げていることが確認できた。
- 一方で、学生・若手の研究力強化策については、説明会開催・ベンチマーク大学への派遣・テニュアトラック制度策定等が考えられているが、まだ道半ばである。将来構想「世界から尊敬される三十傑大学としての優れた研究力」を支えるベースがここにあることを考えると、更にスピードアップを図ることが望まれる。
- アンダー・ワン・ルーフ構想に基づく新しい産学連携推進体制の構築に期待したい。
- 「国際混住型学生寮」はどれくらいの効果があるのか分析をしてもらいたい。